八代妙見祭

・妙見宮祭礼神幸行列　（熊本県指定重要無形民俗文化財：昭和35年4月22日指定）
・妙見宮祭礼神幸行列関係資料/笠鉾・神輿（熊本県指定重要民俗文化財：平成15年4月16日指定）

祭礼日
毎年　11月22日（お下り）
　　11月23日（お上り）

八代妙見祭とは

市内妙見町（宮地校区）にある八代神社（旧妙見宮）の祭礼で、毎年秋に行われ、古い歴史を持つ八代地方最大の年中行事です。「妙見宮祭礼神幸行列」として熊本県重要無形民俗文化財に指定されています。

この祭礼のクライマックスは、11月23日※に行われる神幸行列（お上り）で、前日のうちにお旅所である塩屋八幡宮に「お下り」していた神輿が、町々から奉納される獅子や奴、笠鉾、亀蛇（ガメ）などに伴なわれて、妙見宮まで約6キロの道のりを還るというものです。

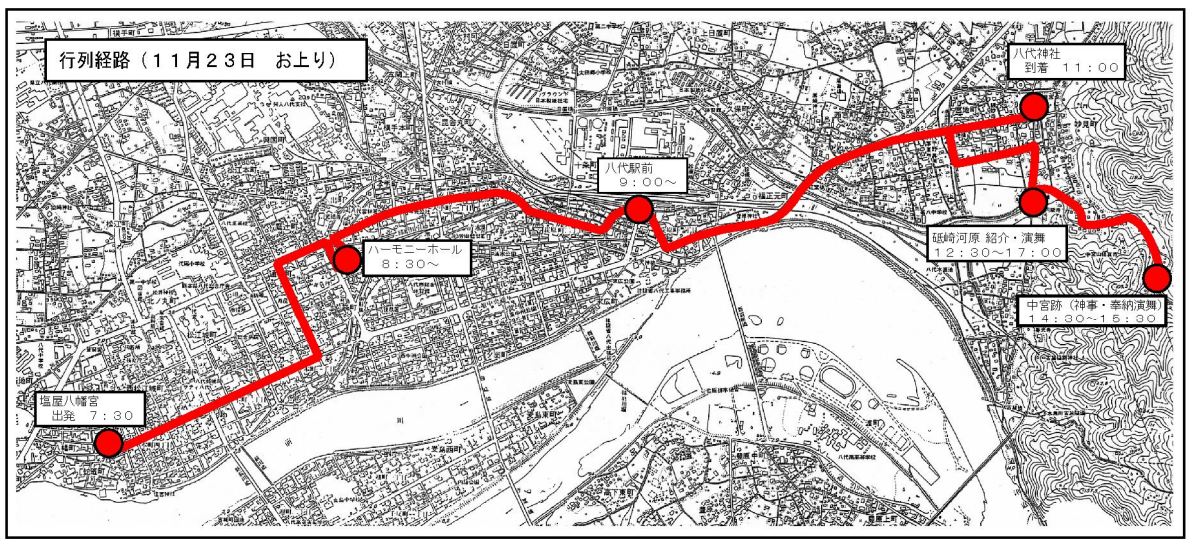
※古くは旧暦10月18日でしたが、明治以降、新暦の11月18日になり、平成5年より11月23日に変更されました。

八代妙見祭の由来

細川忠興は妙見宮の復興に心魂を傾け、寛永12年(1635)に神輿一基をはじめ、祭礼のためのいろいろな道具や寺社家の装束に至るまで寄付し、祭礼神幸行列を復興させました。神輿の天井には、自ら龍の絵を描いたと伝えられています。この復興期の祭礼は、神輿を中心として、その前後に神器や祭具を奉持するおびただしい町人の列に神主・社僧・武士が乗馬や徒歩でお供し、神馬は細川家の馬を出し飾馬は忠興家臣団の上級侍から出す豪壮な行列でした。

忠興没後、八代城に入城した松井興長は藩に伺いを出し、松井家の請祭りとして祭礼を引き継ぎました。松井直之晩年の元禄期、この神幸行列に百姓衆の奴・町衆の獅子・笠鉾・亀蛇等がお供することが始まり、現在の豪華な祭礼の原型が成立しました。

松井家三代（興長・寄之・直之）の一貫した努力により、武士中心の祭礼に町衆・百姓衆が参加し、天下泰平を楽しむ祭礼へと転換してきたといわれています。



神幸行列の出し物

◆笠鉾

昔の人々は、榊や御幣などに神様が宿ると考えていました。笠や鉾にも同じ意味があり、神様を乗せた笠鉾が町々を練り歩くことで、悪霊が退散し、人々に平和がもたらされると考えられていました。笠鉾は高さが4m以上もあり、祭りのとき以外は、全部で200個以上もの部品に解体し、30個近い箱に納められ、町ごとに保管されています。祭りの数日前になると、町の人たちが集まり笠鉾を組み立てます。組み立てや解体の方法も江戸時代から伝わってきた大切な伝統です。

笠鉾が妙見祭に出るようになったのは江戸時代の天和・貞享頃（1681～1687）といわれています。最初は簡素であったものが次第に豪華なものになっていったようです。松井家文書には、笠鉾「菊慈童」の移り変わりが記されており、それによると、推定図のように傘の上に「宮町」と町名を記した飾りのついたものを1人で持っていたのが最初の姿のようです。その後、元文3年（1738）に他の笠鉾のように二重の笠に菊慈童の飾りのついた4人持ちのものになったことがわかります。豪華な飾りのついた笠鉾は、いわば"風流化されたまちの印"なのです。

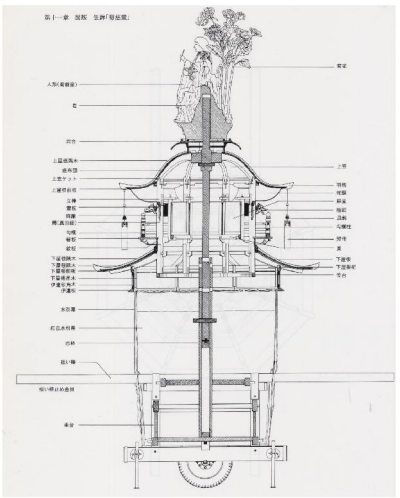
様々な工芸技術が集約された笠鉾は、まさに妙見祭の華といえます。その笠鉾を約300年にわたって大切に受け継いできたのが旧城下町の町人たちでした。

現在の笠鉾の外見は建物のようですが、断面図を見ると笠鉾を支えているのは中央の1本の柱であることがわかります。伊達板や水引幕などの飾り付け用の部材はすべて上屋根からぶら下がっています。

「傘」自体が大型化し、豪華な「笠鉾」へ変容していったことがよくわかります。

笠鉾菊慈童初期の姿
（推定図）

笠鉾「菊慈童」


笠鉾「菊慈童」断面図

本蝶蕪（本町）　蘇鉄（二之町）　西王母（通町）　猩々（紺屋町）　蜜柑（中島町）　恵比須（徳渕・渕原町）　松（平河原町）　迦陵頻伽（塩屋町）

絵巻に描かれた笠鉾「猩々」(左)と「西王母」(右)

現在の妙見祭の出し物　　祭礼絵巻に描かれた出し物

◆獅子舞

獅子舞の創始者である井桜屋勘七は、八代城下町の貿易商で、長崎には毎年のように渡航していましたが、その際に見た諏訪神社祭礼(おくんち)に出る羅漢獅子の舞楽に感銘を受け、妙見宮祭礼にとりいれたいと思い稽古に励みました。この獅子舞は元禄4年（1691）にはじめて妙見祭に奉納され、今日まで元禄文化の伝統を伝えています。中国風の獅子、楽隊が特徴です。

◆奴（花奴）

花奴は、宝暦2年（1752）に松江村の虎右衛門によって創設されたと伝えられています。挟箱・立傘・台傘の三組に分かれて、三種の道具を二人一組で掛け声とともに空中で渡しあいます。

◆亀蛇（ガメ）

出町から出され、「ガメ」の愛称で親しまれています。約1300年前に妙見神を乗せて海を渡ってきたという伝説上の生き物です。妙見神は北斗七星を神格化したもので、北の方角を守る「玄武」(亀の甲羅に蛇が巻きついている)が、ガメの原型と思われます。

◆神馬

細川忠興以降、代々の城主は、毎年祭礼のため、愛馬の中から神馬を出していました。特に松井直之は、貞享元年（1684）神馬を永代寄進し、それが慣例となりました。その後明治・大正時代までは、田中町が、神馬を奉納する権利をもっていましたが、現在では、希望者を前年の12月1日に妙見宮に集め、抽選によって次の年に神馬を出す団体を決定しています。

妙見祭に類似した八代近郊の祭りの出し物

八代近郊には、妙見祭の影響を受けたと思われる祭りがあり、江戸時代の八代文化圏の広がりをあらわしています。

小川阿蘇神社（宇城市小川町）　宮原三神宮（氷川町）

獅子舞

奴

亀蛇

制作：八代市教育委員会　文化課